
世界は本当に死んだのか

旧太郎とその仲間たち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は本当に死んだのか

【Nコード】

N9133E

【作者名】

旧太郎とその仲間たち

【あらすじ】

不良から一変、博士となった「ウチタニ」が人類が滅亡したかのように思える世界を舞台に生存者と共に旅をする物語。

EXCLAMATION 『!』 (前書き)

この作品には、どこかで使われた設定などが所々、登場します。

EXCLAMATION『!』

この屋根高のボロボロの家に来て1年。そして、その家を改造して3年。

ここに住む「ウチタニ」とゆう博士は、学生時代、札付きの悪として恐れられていた不良だった。勉強に勉強を重ね、遂に大学に進学し、博士号を獲得。今は耐震性、津波性に優れた、外見はボロいけど中身は改造しつくされた、とんでもない研究所になっている。

助手もおらず、一人で研究室のソファで寝ている頃、世界では戦争が勃発していた。一部区域では核戦争が始まっているとか。

「荒れてんなあ……」

彼はソファに寝転がりながら、冷蔵庫から取り出したビールを一口飲み、また眠りについた。

前から世界大戦が行われていた事は知っていた。日本は戦争をしないとっておきながら、日本を守るために自衛隊を戦いにむかわせている。ウチタニの友人もその自衛隊の一人だった。

遠くで何回も爆発音がしていた。たぶん海にでも爆弾が落ちたのだろう。しかし、そのあとウチタニの研究所を激しい揺れが襲った。

「うお！」

ソファから転がり落ち、同時に眠気も吹き飛んだ。

「おいおい……崩れそうになつたぞ……」

周りを見回してみると、窓が目に入った。

「雪？」

ウチタニは窓の向こうを見つめながら呟いた。

「8月だぞ？どうゆうことだ？」

8月12日、彼にとつて……いや、彼にもとつて衝撃の事実をぶつけられる日になりました。

着ていた黒いカッターシャツの上から白衣をまとい外に飛び出した。勢いよくドアが開き、雪が研究所に入ってきた。

外は雪が降っているとゆうのに寒くは無かった。それに研究所の周りにあった家はなく、大地は雪に覆われ、そこはまるで雪山のようになっていた。

（２）EXCLAMATION『！』

二三秒、一度研究所に戻った。頭の中を整理するためだ。

近所の「オカダ」さんの家も無く、その他の近所の知り合いの家も跡形もなく消えていた。一面、白銀の世界にたたずむ自分のすがたからは、映画「猿の惑星」の１シーンが想像できた。

流石のウチタニも戸惑って、少しだけある冷静さを失いかけた。

白衣の胸ポケットから煙草を一本取り出し、口にくわえ、火をつけた。煙草を取り出す指はさっきの映像を見たためなのか、ガタガタと震えていた。

ソファアーにドンと座り、煙草を口にくわえながら頭の中を整理していった。

「えっと…爆発音がして、地震が起きて、耐震性、津波性に優れた研究所が壊れそうになって…目が覚めて、外見たら、雪が降って、でも寒くなくて…しかも家とか道が消えてて…」

さっぱり解からなくなったウチタニはもう一度外にでてみた。後ろを振り返って、後ろに下がっていった。どんだん外から見た研究所が見えてきた。ボロい外見が見えてくるはずなのだが、見えたのはその外見が剥がされ、改造された部分が完全にむき出しにされて銀の鉄が輝く研究所だった。

ウチタニはその変わり果てた研究所を見ながら呟いた。

「……塗装しとけば良かったかなあ……」

そんなのんきなことを驚きを隠すように言った。

ウチタニはもう一度、研究所に戻った。

「いや…なにアレ？新品？ボロい外見、完全に消えてんじゃん…」

…いや、前からいらねえんだけどお……なんでだ？」

ソファアーにゆっくりと座り、もう一度窓を見た。やはり雪は降っていた。

「すごい揺れだったなあ…崩れそうになったもんなあ……」

地震で外見が剥がれたのなら、剥がれた外見はどこに行ったのだらう。

「津波？」

窓から目をそらして前を向いた。津波で流されたのなら、話がつく。ウチタニはテレビを付けてみようとしたが、電源が点かなかった。コンセントは入っている。しかし、なんと電源ボタンを押しても点かなかった。

「これも津波かあ？」

ウチタニはさつきからこの音の無い静かな世界にうんざりしていた。寝る前までは車の走る音もしていたとゆうのに。

「くそっ」

ソファアにドンと座り、吸っていた煙草を灰皿に擦り付けた。

「生きてんの俺だけじゃねえだろうな……」

自分が呟いたその言葉に不安を覚え、母親に携帯で電話した。しかし、繋がることは無かった。さらに不安を覚え、片っ端から知り合いに電話をかけた。同じように繋がることは無かった。

「はあ……」

ガクツと腰を曲げ、頭を下ろした。携帯を握り締めた手は、股の間に入っていて、目線はそれに向けられていた。

しばらくその体制でじっとしていると、ウチタニの頭の中ではある仮説が出来ていた。

(3) EXCLAMATION 『!』

世界の戦争の中で核戦争が起きていた。その核戦争のおかげで、地震が発生し、津波が起き、その津波は世界をのみこんだ。

「ん？」

ウチタニは我に返った。その後、下を向いたまま頭をかきむしった。

「あゝ…いやな仮説たてちまったなあ……」

自分がたてた仮説に後悔を示しながら前を向いた。

「いやでも…もしかして……」

そんなことを呟いてから不安が自分を包み込みそうになっていた。

ウチタニは我慢できずに、食料と飲料をバックに積み研究所を飛び出した。もう一度研究所を見てみると、やはり、新品のようになっていた。もちろん、周りの家も無かった。

「俺の仮説が正しかろうと、正しくなろうと関係ねえ。とにかく、生きてる奴を探そう」

ウチタニは進みだした。研究所がどんどん遠くなっていく。

「助手でも雇っとけばよかったかなあ……」

振り返って、ウチタニは呟いた。

2時間程、道なき道をまっすぐ歩いていて思った。自分の仮説は正しいのかもしれない。この様子じゃ自分の親、友達は生きていないだろうと確信した。悲しみがあらゆる方向から襲いかかった。来たが、必死でこらえて1歩1歩雪を踏み、前に進みだした。

「ん？」

遠くの方で緑色の物が動いた。

「なんだ？」

人が生きているのではないかと、希望を胸にそっちの方向に走り出した。すると、ザックザックとなる足音に気づいたのか『それ』は逃げ出した。

「お…おい！待てよ！！」

『それ』に大声で呼びかけてみると、『それ』は立ち止まり、こつちに振り返ったかのように思えた。

「ヘルプミー!!!」

『それ』は大声でそう叫んだ。1歩1歩近づいてみると、『それ』が軍隊の者だとゆうことがわかった。英語を話すところから外国人だろう。

「おい！あんた名前はなんてんだ!!」

手を大きく振って呼びかけてみた。

「アイム、ローレンス!!」

軍人の男はそう叫んだ。

「ん？ちよつとまって！何で俺の言葉が通じんだ!？」

ウチタニがそう叫ぶと、ローレンスの口が一回開いた。「あ…」とでも言ったのだろう。

「まあいいや…ちよつと待っとけ！今からそこに行くから。動くなよ!!!」

ウチタニはローレンスのもとへ走った。ローレンスは18ぐらいの金髪の青年であった。

「なあ……何があつたんだここで……」

息切れしながらウチタニが聞くと、ローレンスの口が開いた。

「えつと…地震が起き」

そう言おうとした時、ウチタニが口をはさんだ。

「おい、日本語喋れんじゃねえか……なんだ？敵軍のあれか？日本語通訳か？」

「いえ！僕は日本軍です！」

両手の平を突き出し、否定した。日本語の方は、完璧にマスターしていた。

「小学1年生の時から居るんです。日本に」

「そうか」

ウチタニは納得して、さっきの話を続きを聞いた。

〔4〕EXCLAMATION!〕

ローレンスはゆっくりと口を開いた。

「地震がドーンって来て…津波がドカーンって来て…」

「なあローレンス、おめえそんな説明しか出来ねえのか？」

ウチタニが口を斜めにいがめた。

「よく覚えてないですよ。津波に流されてしまったんですから…」

ローレンスはウチタニから目をそらした。しばらくして、またウチタニほうを向いて怒鳴った。

「あなたもわかってるでしょ？あの災害！」

「わかってるつつても、俺、家の中に居たからなあ……」

その言葉にローレンスは目を丸くした。

「え！？なんで生きてるんですか？家の中に居たのに……」

「生きてちや悪いか？俺の作った研究所をナメんなよ？」

ウチタニはローレンスの額に人差し指で一回突いた。

「てか、お前も何で生きてんだ？」

ウチタニは聞き返した。

「え？ぼくは地下道にいて」

そう言いかけた時、ローレンスは何か思い出したかのように「あっ！」と叫んだ。

「地下道に怪我をしてる友達が居るんです！早く来てください！」

ローレンスは強引にウチタニの手を引つ張つり、走った。

「お、おい！」

ウチタニは怒鳴ったが、それを無視してローレンスは白銀の道を通り進んだ。10分くらい走って、地下に繋がる道を見つけた。その道はマンホールみたいな地面に空いた丸い穴のことを指していた。

「ここに落ちるのか？」

「落ちるんじゃないません。下りるんです」

ウチタニとローレンスは穴を見下ろしながら言った。穴の中は暗く、

随分深そうだった。

「はしごを使って下りますから、決して落ちないように」
そうウチタニに警告し、ローレンスはゆっくりと穴の中に消えてい
った。しばらくしてウチタニも抵抗を感じながらも穴の中へ降りて
いった。

(5) EXCLAMATION 『!』

はしごを使って降りる『カンカン』と暗い穴に響いた。暗いと言っても底に黄色い明かりがある。そこに先に降りたローレンスが手を振っている。途中から飛び降りてローレンスの元へ着地した。着地したときに、こけそうになった。そこには薄暗い道が果てしなく続いていた。

「ここか？」

「はい……」

ローレンスはじっと前を見続けていた。しばらくすると、ローレンスは歩き出した。ウチタニもそれについていった。

しばらくその薄暗い道を進んでいると、右側の壁にもたれ、血だらけの片足を伸ばし、もう一方の足を三角にして軍服の男が座っていた。勿論、ローレンスと同じ年頃のように。彼はこちらに気付いておらず、ただ、血だらけの自分の足を見つめて、痛みをこらえていた。

「友達ってあれか？」

ウチタニはローレンスの方を横目で見て、小声で言った。

「もう一人います」

ローレンスは「友達」の方を指差した。よく見ると、その「友達」の横に三角座りをした女の子がいた。たぶん「友達」の彼女だろう。真横から見えていたせいで「友達」の背の高さで、その女の子の姿が見えなかった。女の子は軍服すがたではなく、高校の制服を着ていた。

「あの子は？」

「僕の友達の彼女です」

「あ、やつぱり？」

ウチタニは少し笑って、「友達」の方へ近づいた。その後にローレンスも早足で近づいてきた。「友達」とその彼女はこちらに気付い

た。

「お前、名前は」

「あ…ケイスケっす……」

少し戸惑いながら、自分の名前を呟いた。ケイスケの彼女も彼の方から顔をだしてこちらを見ていた。

ケイスケの足の傷は敵に一発撃たれたものだ、すぐわかった。傷口が少し腐ってきていて、匂いがした。ウチタニが少しケイスケの足を持ち上げると、「うっっ！」とうめき声を上げた。

「ちよつと、おっちゃん！」

さっきまでケイスケの後ろにいた、彼女がケイスケをかばうようにウチタニの前にてきた。彼女は目を光らせウチタニを睨んだ。

「お…おう…すまねえな……」

ウチタニはケイスケの方を見た。その彼女から目をそらすためだ。しばらくすると彼女はまたケイスケの背中に戻った。

<ちよちえなあ……>

ウチタニはケイスケの後ろにいる彼女の背の高さの事を心の中で呟いた。ウチタニは小さい女性タイプだ。

(6) EXCLAMATION 『!』

「立てる？」

ローレンスはケイスケの左脇に腕をいれ、右肩に手を置いた。

立てるわけがなかった。力を入れると必ず多量出血を引き起こす。

「おいおい、あまり無理に立たせるな」

一言ローレンスに告げると、ウチタニはケイスケの彼女の横に、壁にもたれ斜めに立ち、胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえ火を点けた。

「おっちゃん、ポイ捨てはあかんで」

ケイスケの彼女は座ったままウチタニを見上げ、笑顔で言った。その言葉からはさっきの勢いは微塵も感じられなかった。

「わかってる。あと、俺の事は『博士』と呼べ」

ウチタニは彼女と目を合わせず、前を向いたまま口から白いけむりを吐き出した。

「あんた、名前なんてんだ？」

ウチタニは彼女の方を向いた。

「ユキ」

彼女は前方を細い目で見ながら小声で言った。

「そうか」

ウチタニは向き直り、また煙草を口に咥えた。

「この怪我じゃ地上には出れねえなあ……」

ウチタニは煙草を咥えたまま呟いた。

「え!？」

ユキとローレンスは勢いよくウチタニの方へ向いた。

「ユキ、ローレンス。ケイスケのこと、しばらく頼むぞ」

そう言つと煙草を捨て、持ってきた自分のカバンを肩にかけて、はしごのあった方向へ足を進ませた。

「ああ…『ポイ捨てあかんかで』 ゆうたやかあ」

ユキは捨てられた煙草に近づいて、人差し指と親指でつまんだ。

3人が見えなくなつた頃には、はしごの方にウチタニは辿り着いていた。そのはしごに手をかけ、上つていった。カンカンと音をたてながら、地面から遠ざかっていった。

光が見えてきた。白銀の世界に辿り着いたのだ。ウチタニはすぐに研究所の元へ走りだした。道はだいたい覚えていた。ザクザクと音が鳴っていた。

しばらくすると、光り輝く研究所が見えてきた。ずっと走っていたため息切れしていて、今にも倒れそうだった。

「あれか……」

ウチタニはまた走り出した。これだけ走るのには理由がある。ケイスケの怪我は軽く壊死しかけていた。このままでは完全に壊死してしまうからだ。

あつというまに研究所に着いて、勢いよく入り口を開けた。

電気が点いていた。点けっぱなしで外に飛び出したのだ。ウチタニは「消してけよ」と思ったが、振り返ってみると、取り乱した自分がいた。

「まあ、いいや……」

ウチタニは頭を掻きむしつた。

入り口を開けっぱなしにしながら、靴を履いたまんま研究所の中へ駆け込んだ。すぐにクローゼットから3つ大きなバックを取り出し、それぞれに食料と飲料を詰め込んだ。自分のバックには、追加で手術用具を白い紙袋に入れてバックに詰めた。

「よし」

一言呟くと、重そうに全部のバックを肩にかけて、研究所を飛び出した。

(7) EXCLAMATION 『!』

ドサっという物音に残された3人の会話は途絶えた。3人は同時に音のしたハシゴの方に振り返った。そこには、4つのパンパンに張った大きなバツクが投げ捨てられていた。

しばらくすると、カンカンという誰かが降りてくる音が聞こえた。みな『ウチタニ』だとわかった。

すぐにローレンスはウチタニの方へ向かった。上を見上げると、白衣が見えた。

「はかせー!」

ローレンスは呼びかけてみた。しかし、ウチタニは何も答えず無言で降りてきた。

「…つかれた……」

腰を曲げ、両手を両膝に付けて体重をかけ、うなだれていた。

するとなにか思い出したかのように「あ…」と顔を上げてローレンスの方をその体制ままで向いた。

「おい、ローレンス。ケイスケの怪我が治ったら、ここを出て行くぞ」

ローレンスは絶句した。『このままでいいじゃないか』と思ったが、口にしなかった。

「半分持ってくれ」

ウチタニはたたずんでいるローレンスに2つのバツクを渡した。ウチタニも残りの2つを肩にかけて、二人の居る方向へ進みだした。後からローレンスも動揺しながらも、ついていった。

「そっいうことだ」

ウチタニはケイスケの肩に手を置いた。

「おいおい…なんで急に?」

「寿命を長くするためだ」

ウチタニは立ち上がり、煙草に火をつけた。

「そんなら、ここに居た方が…食料もあるし……」

ケイスケは目の前に置かれたバツクに視線を向けた。

「この食料も、何ヶ月かたつと無くなる」

ウチタニはケイスケの方に目を向けず、壁にもたれて煙を吐いていた。

「出て行ってなにするん？」

声の主はケイスケの彼女のユキだった。ユキのポケットにはウチタニが捨てた煙草がまだ入っていた。

「まだ残っている町を探す」

ウチタニは煙草を手に取り、灰を落とした。

「そんなのねえよ……」

ケイスケは呟いた。その目は完全にウチタニを見ていなかった。

「あるかもしれないだろう？」

軽く笑みをうかべ、ウチタニは煙草を啜えた。

「奇跡が起こったらの話だけだな……」

煙を吐き、バツクの元へと足を進めた。

「奇跡なんて起こるわけねえよ！」

ケイスケの口調は強まっていた。しかし、ウチタニはバツクの元で胡坐をかきながらバツクの中をあさっていた。

「人生最後かもしれないねえのに、奇跡もとめちゃダメか？」

ウチタニはバツクから一つずつ手術道具を取り出した。

「じゃあ…一人で行ってくれ……」

ケイスケは吐き捨てるように言った。すると、ウチタニは手術道具の一つを指でくるくるとまわしながら、とんでもない事を言った。

(8) EXCLAMATION 『 ! 』

「じゃあ、この荷物全部持つてくからな」
全員驚きの声をあげた。

「そんなら来いよ。死ぬの待つよりいいだろ？」
ウチタニは手を止め、ケイスケの傷に目を向けた。

夜がやってきた。ケイスケの足には銃弾がこめられていた。昔、
学んだ医術を屈して銃弾をとりのぞいた。

ケイスケの足には白い包帯が何重にも巻かれていた。手術した本人は、皆の後ろの方で横になって寝ていた。

二人はケイスケを囲むようにして座っていた。しばらく沈黙が続いていた。ウチタニが言っていたことが気になっていたのだ。

「行くか？」

ケイスケだった。彼は大阪から転校してきたユキに一目ぼれし、ストリートに告白をして交際関係を築いたのだった。ローレンスとは軍隊に入った時に仲良くなった友人だ。

他の二人はケイスケに対する相槌なのか、「ん〜」と首をかしげていた。

「二人して首かしげてんじゃねえよ」

「私行こつかなあ……」

「ええ!!」

ケイスケ、ローレンスは同時に声を上げた。すると、ケイスケが「俺も行く」と手を上げた。

残ったのはローレンスだった。みんなが行ってしまうと一人残ることになるので、「じゃあ、僕も……」と一応言ってみた。

「寝ろ」

後ろから一言、声がした。

三日目の朝がやってきた。このところ、ずっと朝が続いている。前日、ケイスケの怪我が治った。

ウチタニは一人、起きていた。

ポケットから煙草を取り出したが中身が入っておらず、箱を捨ててバックから新しい煙草を取り出し、啜えて火をつけた。

煙がゆっくりと流れて行き、それが壁にもたれて寝ているケイスケの顔にかかった。ケイスケは咳き込むと同時に目を覚ました。その咳きでローレンスが目を覚ました。

「ん…？朝？」

目をこすりながらローレンスは呟いた。

「そうだ。朝だ」

ケイスケは立ち上がりつつ背伸びをした。

「なんだろう…：…いつもの朝だけど、変な感じだなあ」

「そりゃあ、三日も続いてるからなあ」

煙を吐きながら、呟いた。

「おーい、起きろお」

ケイスケがユキの体を揺すった。

「ん〜」と唸りながら、体を起こした。寝癖で髪が爆発していた。

「そろそろ行くか」

ウチタニは立ち上がりついでに灰を落とすとした。

「もう？」

「お前の怪我也治った事だし、行こうぜ？」

そう言うと、ハシゴの方へと足を進めていった。他の三人もゆっくりと後に続いた。

The moon『月』

白銀の世界、足を踏みしめてウチタニはゆっくりと歩き続けた。

1時間ほど歩いてみると後ろから声がした

「やっぱりあそこに居たほうが良かったのかなあ」

後悔の声だった。声の主はわからなかったが、女性の声だったため、たぶんユキだろう。

しかし少しだけだがウチタニの心にも後悔が存在していた。このまま滅びていない街が確認できないまましていると、確実に食料が無くなり遭難者のように、ゆっくりと死んでいくに違いないだろうと思うと、引き返したくなる。

「うぐふああ！」

断末魔のような声がした。振り向いて見ると、ローレンスが見事に扱っていた。

「どうした」

ウチタニが一応聞いてみると、ローレンスはゆっくりと立ち上がり雪を払いながら「なにかに躓いた」と予想通りの答えが帰ってきた。少し笑みを浮かべたようにも思えた。

「なにに躓いたんだよ」

ケイスケはローレンスに近づいてみると、そこには赤い破片が雪の中から飛び出していた。

「よく見えなかったなあ」と思うと、ケイスケの頭の中に「言葉」

がよぎり、その言葉が自然と口から出た。

「東京タワー……？」

沈黙。

「アホか」

沈黙を破ったのはウチタニだった。

「だよなあ……早とちりはダメだよなあ……」

笑顔を見せ、一人呟くように言うケイスケの額に汗が見えた。

雪を蹴るようにして歩く四人の影を陽は照り映していた。

時刻はもう20時くらいであった。

「今日は久々の夜やなあ」

ユキが空を見ながら言った。

「そうだなあ」

ウチタニは煙草の煙を吐いた。すると、今まで聞こうと思っていたことを思い出した。

「そういえば、あんたはどこ出身なんだ？」

首だけを動かし、ユキに質問した。

「大阪。転校したんや。ケイスケんとこの高校に」

ユキはまだ空を見ていた。

「で？恋に落ちたと」

ニヤニヤしながらまた煙草を口に啜えた。

「ロマンだなあ……」

羨ましく和むように聞いていたローレンスが口を開いた。
しばらくまた沈黙が続いた。

「……まあ、そっから戦争が始まって、今こんなところにいるんだけどなあ」

ケイスケが呟くように言った。

その言葉に反応したのか、ユキ下を向き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9133e/>

世界は本当に死んだのか

2010年11月18日03時08分発行